

【会議名：令和6年度 第1回 総合教育会議】

会 議 錄

日	令和7年2月10日(月)	時間	13:30～15:10	場所	糸魚川市役所 201・202会議室	
件名	(1)不登校対応について (2)その他					
出席者		<p>【出席者】 13人</p> <p>市長 米田 徹 教育委員会 教育長 鶴本修一 教育委員 谷口一之 齊藤里沙 楠 愛 (欠席 秋山伸宏)</p> <p>【事務局】</p> <p>山本喜八郎 (教育次長) 室橋淳次 (こども課長) 田村公一 (こども課長補佐) 古川勝哉 (こども教育課長) 小川豊雄 (こども教育課参事) 磯貝恭子 (生涯学習課長) 本間正之 (生涯学習課長補佐) 嵐口 守 (文化振興課長)</p>				
	傍聴者定員	10人	傍聴者数	0人		

会議要旨

1 開会 (13:00)

2 市長あいさつ

令和6年度第1回糸魚川市総合教育会議にご出席いただき、感謝申し上げる。教育委員の皆様には、平素から市政、特に教育行政に格別なご理解とご協力を賜り、心からお礼申し上げる。本日の会議は不登校対応を議題としている。市内の不登校の児童生徒は増えつつあり、児童生徒にとって人生の大切な時期での不登校を危惧している。大人はゼロになるよう対応しなければならないが、依然としてなくならないという現状は何が原因なのか。全国的に兆候が見受けられる。昨朝、NHK番組で不登校の子どもたちを特集していた。2時間かけて親御さんが学校まで連れてきて、また迎えに来るという姿を見て、もう学校現場だけ、地域だけでなく、家庭も一体にならなければならない。私は昭和24年生まれの団塊の世代であるが、子どもの喧嘩は日常茶飯事あり、子どもの社会の中で修復されてきた。教育長との話で、不登校対応が出口部分だとかなりのパワーとエネルギーが必要となる。逆に入口で止めれば、エネルギーを使わなくても良いのではないか。実際の現場では簡単にいかないことはわかっているが、やらなければならない。限られた時間ではあるが、教育委員の皆様から多面的なご意見、またご提案を賜り、充実した議論となることをお願い申し上げる。

3 議事

(1) 不登校対応について

①不登校の現状と課題について

○事務局 (説明)

資料の1ページ、1当市の不登校に係る現状と課題について、まず表1で平成30年度から

令和6年度までの小中別の不登校の児童生徒数、当市の発生数、全国の発生率を記載している。令和6年度の表は12月31日までの数字で、児童生徒は減っているが、全体としては不登校児童生徒が増えている現状。また、中学校の発生率は全国にかなり近くなっている状況。具体的に①番から⑥番まで記載させていただいた。①不登校児童生徒数の発生数、発生率は年々増加している。その要因や背景は複数であったり、複雑であったり多様化している。各学校において自教室以外の別室、それから市では適応指導教室、ひすいルームと言われているものを設置しているが、それらの場にも参加できない児童生徒がいるため、新たな学びの場が求められている。例えば中学生の不登校生徒数は53人だが、ルームに登録している生徒は十数名で、日によって1人であったり2人であったり、多くても4人ぐらいが来ている。多くの生徒は通えていない状況である。②不登校に係る児童生徒や保護者の相談件数は、年間3,000件を超えており、当然、児童生徒の心配不安であるとともに、保護者にとっても大きな悩みとなっている。③不登校児童生徒の中には、学ぶ意欲はあっても多人数で学習することや集団行動が苦手するために勉強ができないという状況もある。そのような児童生徒に配慮していくことが求められている。④不登校に関する対応窓口については、学校であったり、校外適応指導教室であったり、また教育相談センター、様々な機関が複数あり、それはある意味良い面でもある一方、保護者にとっては機関の役割がわかりにくくなっていることもあり、相談窓口の一本化や明確化が求められていると考えている。⑤児童生徒一人一人の気持ちや特性を受け入れながら、個に応じた学びの場や学習内容、子どもたちが自分で選択できるような学習環境作りが求められていると考えている。⑥時々学校に来る、またひすいルームに来ている子どもは良いが、ほとんど登校できていない、また家庭訪問をしても、声だけ出して、顔を見せてくれないといったような子も少人数はいる。子どもたちの心情や状況を調査することで、子どもたちに合った場の提供が求められていると考えている。

○教育長

不登校の当市の推移については、表の中にしっかりと数字でカウントされている。家庭教育の中心は保護者であると形を捉えたときに、保護者の人たちの集まりの会議、結の会がある。いろいろな人たちが集まって情報共有したり研修をしたり、これからの方針について話し合うような場面があると聞いている。結の会のメンバー人数は多くなっているのか、組織の雰囲気はどのような形になっているのか。その辺り情報提供していただきたいし、結の会で具体的にどのような情報交換が行われ、その課題解決に向かっていくため研修や勉強会、あるいは子どもたちの成長を受け止めるための場、子どもたちの発達についての理解や学習会みたいなものはどうなっているのか。情報があれば提供してほしい。

○事務局

結の会は、不登校について語る会という名前であったが、イメージが悪いということで、今年から「多様な学びを語る保護者の会」と名前を変更した。毎月実施しており、保護者に積極的に参加していただきたいということで周知活動も取り入れている。話す内容は少人数のため、個別事案で話せる内容を話しており、生徒指導の担当主事やカウンセラーも参加しているので、具体的な教育相談やご家庭の話を聞くなどしている。また時々、不登校のお子さんも参加している。一緒に話をする、また、何か一緒に作って食べるというような活動も行い、家に引きこもりがちの子どもが、そのような場に参加するところをまず手がかりにして少し学校にも足が向けられるような形で取り組んでいる。全体的な人数の推移は把握していないが、親御さんは10名位と聞いている。

○市長

10名というのは同じ人ではないということか。

○事務局

固定メンバーもいるが、多少入れ替わりもある。

○市長

うまくつなげていけるようにしてほしい。

○教育長

子どもを抱えている保護者が最高最大の支援者。直接関わる子どもの理解者という立場に立ったとき、保護者が不安のどん底であったり、先がわからなくって戸惑っていたり、悩みをなかなか話せなかったり、という部分が一番子どもにも影響するのではないかと思うからこそ、この保護者の集まりの機会は安心して話すことができ、安心して時間を過ごせる。そういう仲間とのひと時の時間がいかに大切か私どもは考えたいわけだが、なかなかその人数が増えない部分は啓発して広げていくようなアクションをもう少し積極的に行っていくべきとの考え方もある。集まった人たち同士の人間関係が少しでも円滑にいくことによって保護者の不安感、あるいは緊張感、あるいは子どもへの関わる接し方みたいなものも少しずつ柔らかになっていることが子どもにも必ず伝わると思っているので、時間の大切さと、その時間の有効な過ごし方を掘り起こしてみたいし、広げていくことをもっとみんなで協力していく必要があると考える。今ほどのお話の中にあった料理を作つて、一緒に楽しむ、食をする部分についての手法は大変私は有効だと思うし、場合によっては一緒にゲームをして遊ぶことや、室内でも、外に出て散策と一緒にやってみることが少しでも芽生えてくると、少しずつ保護者の意識も明るくなっていくのではないかという気がする。どのような工夫改善がこれから行われるのか。もっと何か挑戦していく必要があるのではないかと聞かせていただいた。

○教育委員

先日研修で若者サポートの方から生の話を聞かせていただいたが、保護者の不安に対してつながるところがあることを教育委員会としても知らせてほしいし、他の方法や何か工夫が必要と思う。今、頑張っている若者の話も聞けないが、虐待など家庭内の問題もある。本人がそのようなことを訴える機会や子どもが学校で伝えられると話せるという環境も作らなければならぬと感じた。当然、保護者もいろいろな考え方があって、虐待や子どもの面倒を見ないとある。その子の場合はいじめ等いろいろあったとは思うが、最初に学校に行けなくなり、面倒を見てくれなかつたことが結構ある。そのような子どもの声は聞かなければならぬと感じている。学校ではやっていると思うが、やはり学校で言えなかつたりする。だからそのような時に素直に話せる場や相談員、専門家がいると一番いいと思うが、学校現場でも教育委員会が窓口になって人を増やす、細かい相談を何でも聞いてくれるなど、そのような場を作つてやらないと子どもの声を聞くのも大切と感じた。いろいろな親がいるため簡単ではないが、子どもも親も含めて相談窓口で声を聞くことを広げていかなければならない。

○市長

報告を聞かせていただき、そして今、皆さんのお話を聞かせていただいて、不登校の子どもたちのことを誰が一番知っているか。70人を親や先生が見る。月1回というのはどうか。強調月間や強調週間のように集中的に行いながら、どのような対応をしていかなければよいか引き出し、短期決戦的にできないのか。マンパワーも必要なため、ボランティア人材も集めて、まず基本的には保護者が一番よいが、知識を持った方々がほとんどマンツーマンで対応できるよう

な環境作りを行う。早めに不登校になっているお子さんの考え方を引き出して、どういうやり方がよいかを見ていくべきではないか。みんな一律ではないため、知識のある人にお願いしても、すぐにたくさんできるわけではない。不登校を防げないかもしれないが、寄り添いながら、ある程度の方向性を把握できると思う。常に1人がついて対応できる、という環境作りをやらなければならない。

○教育委員

対応窓口一本化の件で、相談するまでの気持ちのハードルが低い方が相談しやすいと思う。窓口がいっぱいあるというより、いつでも誰でも相談できるようことが大事で、ちょっとしたことでも相談できるような体制がよい。学校のスクールカウンセラーや相談員が常にいるような体制を作る。マンパワーが必要で人員配置の面では難しいが、対応窓口を一本化するとしたら、できるだけ顔の見える関係の中で信頼関係を作っていければよい。

○教育委員

保護者の立場として考えたとき、自分の子どもであればどうしようという感じがある。自分の仕事もどうなるのか。知り合いに聞くと、仕事を辞めざるを得なかった、子どもが日中ずっと家にいることが気になる。集団の中での学習の負担になることはよく聞くので、子どもが自分自身を悪い子なんだ、みんなと同じことができないことで落ち込むところがあると感じる。他の市町村では月に1回ではなく、ずっと開いている場所がある。解決は難しいが、思いを持った家族の受け皿になるものができないかを感じる。保護者的心の負担と子どもの心の負担を軽減できるような環境を考えていくのが大事。

○市長

しばらくはマンツーマンで寄り添い、ケアをどうすればいいのかをやらないと、あれは駄目、これは駄目と言っても心を開いてくれないと思う。その心開かせるのは誰が一番いいのかを選んであげることが大事。ある期間そういう形をやることで、心の扉をどのように開いてあげるか、解決する方法を見つける一つの糸口を探すことが大事ではないかと思う。みんなで短い期間に拾い出し、早めに対応してあげる、また時間のかかる子もあるだろう。強調月間、強調週間かもしれないが、体制作りや情報交換をしていかないと減っていかないし、子どもたちの健康を考えれば複雑だが、年齢が高くなればなるほど難しくなる。キャッチボールを何度も何度も通しながら行うことが必要。

○教育委員

結の会が不登校の当事者だけの会だが、不登校の家庭を応援する気持ちを持った人はおそらく沢山いると思うので、その人たちが集まり何かできないかを実践できるような話し合いの場があると良い。結の会を応援する会があってもよいと思うが、結の会ができて何年ぐらいになるのか。

○事務局

6～7年になる。

○教育委員

結の会の経験者や見守りの方などが関わることが良い。

○市長

人材確保をどうしていくかも大事である。

○事務局

結の会出身の方で現在、若者サポートセンターにお勤めいただいている方もいるので、そ

いった方をキャスティング、一つの役割として不登校の部分を助けていこうとしてもらえばありがたい。

②野外体験活動プランほか現在の取り組みについて

○事務局（説明）

2ページ、不登校を生まないための当市の子育て支援及び園・学校での特徴的な取組について、この中核を成しているのが平成21年から始めている0歳から18歳までの子ども一貫教育の、特に3本柱のうち、豊かな心の育成が大きなウエイトを占めている。特に家庭では、子どもとの屋内外での遊び、それから温かい声掛けやスキンシップを大切にして愛着形成を図っている。冬場の運動する場所として屋内遊戯施設の建設に向けて話を進めているが、夏場であれば豊かな自然を生かした遊びが大事になる。学校では遊びや教育活動全般を通して道徳性や社会性を育んでいる。地域では地域ぐるみによる心の教育や体験活動は公民館活動として盛んであり、子育てを地域全体でバックアップしている。（2）教育委員会と園学校との連携協働による取組では、園や学校では全ての教育活動において自己肯定感と社会性を育む活動を多く行っている。①地域に開かれた特色ある活動として、例えば小学校ではフウセンカズラ高齢者見守り隊活動を2012年度から行っている。コロナ禍で中断していたが再開し、地域の方も大変喜んでいるとの新聞記事も拝見した。今年来年と県の指定を受け、根知小学校ではアントレプレナーシップ教育を一生懸命進めている。地域の企業、題材等使いながら子どもたちが外に向かって発信していく。今年は子どもたちが作った缶バッジを販売して新聞等に大きく取り上げられていた。②ジオパーク学習を中心とした体験活動を重視している。豊かなジオパークを生かした活動を支援し、副読本もたくさん作っている。令和5年、6年に作成したピックアップ事業プランという資料を作つて配布している。③宿泊体験活動は多くの学校で小学校高学年になるとキャンプや野外活動の体験活動をし、1泊2日で共同生活をしながら、自己肯定感や子ども同士の関わり、関わる力を育んでいる。④全校縦割り班活動、異年齢交流で、清掃を縦割り班活動で行う、遠足も縦割り班でグループを作つて歩く、また集会活動なども学年を飛び越えて一緒に活動している。その中でリーダーはリーダーとして、低学年はフォロワーとしての自分の役割を果たして社会性を育んでいる。⑤道徳教育、人権教育、社会貢献活動。これは全学校で行っており、中学校区ごとにいじめ見逃しゼロスクール集会を毎年行っている。また、能生中学校では能生小学校と海洋高校、そして地域の人と一緒に能生駅前でいきさつ運動を行つておつり、長く続いている。青海中学校では休日に実施しているが、生徒の参加率も高く、地域、保護者と毎年、海岸清掃を行つておつり。⑥保護者、公民館、地域との連携協働による取組として、教育懇談会を年に2回、通算28回開催しており、大変誇れる教育委員会事業と考えている。⑦家庭教育力の向上、家庭と連携した愛着形成を重視している。⑧今年度、糸魚川市野外体験活動プランを作成している。表紙だけの資料を1枚添付している。⑨学校、公民館との連携融合した事業を多く実施し、⑩地域の社会教育力を生かした社会教育活動も充実してきていると考えている。特に最近では、部活動の地域移行ということで地域の中で子どもたちのやりたい活動ができるように、今、教育委員会で事業を進めている。

○事務局（説明）

生涯学習課で行つておつりの社会教育活動の中で、子どもの不登校対策について、大きく二つの役割を担つておつりと考えている。一つは、子どもが元気に学校に通えるような豊かな心の発育を促す役割、もう一つは、もし子どもがつまずいて学校に行けなくなつたとしても、自分の居

場所があちこちにあるという環境作りがこれから生涯学習課の大きな役割と思っている。一つ目の心の発育は、不登校になる原因の一つが人間関係のトラブルと思っている。人の気持ちがわかる子どもになるため、想像力を養うことが一番大事と思っている。一番良いのは自分が経験していないなくても、人の経験をしっかり感じることができる読書活動がまず一つ。もう一つが、今ほどの野外体験活動という子どもの五感を置き換えて、それが想像力を育むことにつながっていくものと思っている。元々、生涯学習課でも、わくわく探検隊やふるさと学習親子塾など、長い間糸魚川の自然を生かした事業に取り組んでいたが、今年度、教育長指示のもと、大野小学校長をリーダーとして作ったプランをお手元に配させていただいた。もう少しでできるところになっているが、このプランの一番の特色は2次元コードが付いていて、そこを見ると、もっと詳しい情報が出てくるというもの。例えば、この活動をするといくらぐらいの予算で、どのような手続きをすればよいか、全てそのまま詰まっているというプランになる。13日夕方にこの活動の報告会を予定している。それから2つ目の子どもの居場所作りは、学校やお家以外に子どもが安心してツアーに入れる場所があれば、行き詰ったときでも他の場所で心を落ち着けて自己肯定感を高めることで、立ち上がって進んでいけるのではないかと考える。その場所は図書館や地区公民館、あるいは図書館に土曜自習室の場を設けており、地域の人が見守る中で勉強して帰っていくところになる。その場所だけでなく、キッズフェスタで小学生がスタッフとしてボランティアする、あるいは高校生のオハルサポーター活動の場も作り出すようにしている。それから先ほどの地域クラブやスポーツ文化活動などで、学校以外に自分の居場所があることが良い。全て行政がやるのではなく、地域にも自然にそのような場所ができるように仕掛けを作るところが大きな仕事と思っており、うまく進まないところもあるが、学校教育と社会教育との連携により進めていきたい。

○教育委員

不登校を生まない取組としてコミュニティスクールがあると思うが、手応えや課題、現状などはいかがか。

○事務局

学校に地域コーディネーターを置いて地域と学校を橋渡しするという活動を長く続けてきたところは誇れと思っている。実際、主に小学校のクラブ活動の指導で学校の先生に代わって地域の方が指導するというシーンが増えており、そこの調整が今大きな仕事になっている。それからコロナ禍で中止になっていたが、中学生で言えば職場体験活動の調整を推進員の方が入っていただいている。今、地域クラブの動きの中で新しい仕事についても推進員の担う役割は増えていると思っているが、少しずつ進めていきたい。

○教育委員

できるだけ相談は心のハードルが低い方が良い。今までコロナでどうしても学校に地域の人入れない状況が続いていたが、また元通りになって改善していく良いタイミングだと思う。小学校から何かしてくださいと言われないと地域の人はなかなか入っていけないので、ちょっとしたことでもどんどん地域に投げてもらえると良い。1時間程度で終わる活動であれば、時間があるときに行けると思う人もいるだろう。空き教室が多くなってきている学校があると思っていて、そこで何か地域活動ができるようになると良い。地域の大人が学校に入っていくことで子どもたちも地域の人が見てくれるし、地域の人に子どもたちが教えるという関係もできてくる。学校が楽しくなる、学校に別の居場所があることもありと思う。

○教育長

関連して、教育委員が以前、『教育糸魚川』に原稿を寄せてくださった中に印象深いキーワードが心に残っている。学校は今まで敷居が高く、地域の人たちが自由に学校に行けないものだと。地域はコミュニティであり、学校も地域もWIN-WINの関係作りをもっとフラットに、敷居を取り払って学校にいろいろな人たちが行き交う。そのような地域作りが、これからもっと求められるのではないかということが書かれていた。学校教育は学校教育、社会教育は社会教育という垣根が、時代の社会的な進歩により学社連携という言葉が出てきた。さらにはそれよりもバージョンアップして、学社協働・融合でお互いの役割だけではなくて、力を合わせて地域を元気づける、その中の第1が子どもたちというフラグがしっかり回っていると思う。そのような意味合いで、学校と家庭以外の場所でも子どもたちが伸び伸びでき、親子が参画して楽しめるイベントや事業や活動みたいなものがもっと豊かに広がっていく。そのことが地域作りになるという構想イメージの中で、今、生涯学習課など学校教育、子どもも含めて一緒に連携活動を進めているということだと思う。その中にこのようなプランもどんどん生まれてきていることが糸魚川の現状ではないか。だから、他市よりも方向性と活動の推進は進んでいると見ている。努力してもできない市町村は結構多い。学校に行けない子どもたちが親子で、例えば地区公民館の地域活動のときに、社会貢献活動でもいいし、お楽しみ会でもいいし、少し角度を変えれば子どもが生き生きできる、喜ぶ方向付けさえしてあげれば、そのようなチャンス作りは結構あると考えている。その中で支援体制に目を向けていただければ、ありがたい。

○教育委員

キーワードがいくつかあり、不登校を生まない子育て支援とあるが、豊かな心はキーワードである。生涯学習課長が言ったワード・五感、ありがたく思う。子どもたちを見ていると豊かな心を育むために大切な触れ合いが二つある。一つは人と触れ合ってもらいたい。一つは自然と触れ合ってもらいたい。水や土で豊かな心を育む遊び、自然体験を取り入れられるような体制作りや土台を大切にして欲しい。人との触れ合いも多様な大人と関わること、つながりがまだまだ強くある。都会に行ってしまうと隣に住んでいる人が分からない。子どもたちの心を育てる強みとしてしっかり大事にしていく。サードプレイス、第三の居場所は学校でも家でもない場所で、例えば学校の中でも言えることで教室でもない、自分の居場所だと思える場所、図書室、校長室、体育館で自分の居場所、サードプレイスは作っていける。子どもが自分で選択をさせてあげられるよう、大人は選択肢を見せて、子どもが選ぶ、それを応援するという関わりをこの地域活動の中でやっていければと感じる。ただこれも子どもが主体的に学び、主体的に参加することが一番の学びだと思うので、押し付けではなく、子どもが選んで始めるような物を大事にしていくと良いものになる。

○教育委員

学校とうまく連携を取ること。学校でできることを公民館や地域でやってみる。工夫をすればまだまだできことがあると思う。自然を生かしたものができる、子どもも楽しみにできる。楽しくできることや自分のやりたいことが選択できれば良い。学校はどうしても押しつけとなる。野外活動や宿泊は大好きなので、体験をぜひさせたいと思う。体験や宿泊体験を公民館で行っている地域もある。

○市長

今、学校でやっていることを逆に公民館に落とし込んでいくことも一つの手かもしれない。公民館事業の中でやれるようにすればいいし、公民館もこれからも変わらなければならぬ。文化活動にも公民館の関わりはもっと広がっていくと思う。学校でやるとどうしても先

生の目線でやってしまうところがある。これから後期高齢者が増え、担い手も多少は増えつつあるのではと思う。全てできるわけではないし、どこの公民館もできるわけではないが、自然の中での今までやってきた公民館活動をステップアップさせるのもいい。

○事務局

子どもが多い公民館と子どもが少ない公民館で差異がある。子どもを遊ばせるために工夫し、特徴を活かして仕組みを見直していく必要がある。

○市長

各地区で公民館を自分たち独自でやっている部分もあるかもしれないので、生涯学習課長のところで情報提供しながら、公民館と連携できればよい。

○事務局

野外体験活動プランは公民館や学校で活用してもらえるように作成した。特に学校の先生に、これを目安にしていろいろな計画を作ってもらえるのではないかという視点も入っている。PTA親子活動でも選択できる。

○教育長

子どもたちと一緒に相談して今年はこれをやってみようよ、という形でやってみる。選択させ、他地域の子でも良い。

○教育委員

私自身、今年保護者として1年間見てきて思ったことは、他の学校との関わりが増えてきたこと。私は南能生小学校で、元々小さい学校で行き来しやすいということもあるが、体育に能生小学校の方が来てくれたり、遠足で磯部小学校に行ったり、最近ではお祭りで磯部小学校の子から来てください、と言われると子どもは張り切る。そういう活動がすごくいいなと思っている。御風カルタを作ってもらったが、いろいろな展望があると思う。小学校、保育園・幼稚園も、横と縦のつながりが多かった年なので、これからも増えていくことを期待している。

○市長

逆に増やしていくこと、市の特徴をしっかり生かしていく。これが入口になる。

③学びの多様化学校の検討について

○事務局（説明）

3ページ、今ほど不登校を生まないための取組をお話したが、残念ながら不登校になってしまった子どもたちの学びの保障として、府外委員も合わせて21名で今年度5回ほど検討委員会を開催した。これから検討委員会から出された案を説明するが、2月3日、市長へ提言という形で委員長から渡されたものである。まず、学びの多様化学校を設置するという方向で提言が出されている。国の方針にもあるが、まずは中学生を対象として、そこから軌道に乗り、小学生のニーズが高まってきたら小学生も視野に入れて考えていきたい。糸魚川中学校の分校という形で作る、それが学びの多様化学校。糸魚川市は大変面積が広いため、ただでさえ近くの学校に通えない。なかなか登校できないという子どもも多く、青海地区にもサテライトという形で場所を提供する。例えば青海中学校の子どもがひすい分校まで行きたいということであれば受け入れるが、普段はそこに指導員なり教師がいて、またひすい分校とオンラインで結びながら勉強していく。オンラインで勉強してもなかなか社会性といったところでは広がりが持てない時は2週間に1回程度、ひすい分校に集まり、そこで一緒に学習するような場も設けていきたいと考えている。それから分校の中心にひすいルーム、不登校対応センターとあるが、現

在のひすいルームが不登校対応センターとして、それぞれの分校との交流連携を調整、また各中学校と連携をとりながら子どもたちの様子を伝えていきたいと考えている。委員から、窓口のハードルを下げた方が良いという話、そこにひすいルームが窓口になると書いたが、少し書き方が悪かったのでは、と思っている。センターは実際の窓口として相談しやすいところ、学校や担任の先生というところで良い。学校に相談してもらったことをひすいルームが情報を受けてコーディネートし、その子に合った支援を提供していく形であり、ひすいルームをセンター的機能、コーディネーター的な役割に直していきたいと考えている。4ページ(4)基本的な理念としての学習の場は、教科書に書いてある学習だけではなく、体験活動等を多くしていく。自分でやるべきこと、やりたいことを考え、それを日々達成して学習を積み重ねていくことで、自己肯定感や達成感、主体性を味わい身に付けさせていきたいと考えている。(5)地域や関係機関との連携は、今まで公民館の話もたくさん出て、活発な交流活動等ができそうな感じがするが、座学だけでは学ぶことも少ない。ましてや少人数で学んでいるので、外に出でいろいろな人、多様な人と関わることで子どもたちの社会性、また次の外へ踏み出す力をつけさせたいと思っている。来年度庁内委員を中心として、「学校のあり方検討委員会」を設置し、この対応と学校についても具体的な協議を重ねていきたいと考えている。

○市長

分校という言い方はやめてもらいたい。子どもたちが行きたくなるようなネーミングしたい。学校のサテライトと考えているからである。子どもたちが胸を張って行けるような、逆に行きたいという感じになるようお願いしたい。まずはその見せ方が大事。

○事務局

素敵な名前を今後考えていくと良いと思っている。学びの多様化学校の設置方式が分校方式、教室方式、学校方式と3つある。今のところ分校方式が良いのではないかということで、検討委員会で案をいただいている。

○教育委員

名称は結構大きい。もっと魅力ある、こういうことを学べる、こういう環境にあるということを出していかないといけない。

○教育委員

ひすいルームは今現在、小学生が行きづらいということを聞いているが、小学生が行けるような環境作りをしてほしい。

○事務局

小学校の受け入れは可能としているが、現在はいない。中学生が軌道に乗ってきたら、考えていきたいと思っているが、小学生は通学の問題があり、お家の方が送ってくれば良いが、距離があると難しい。

○市長

小中学校の対応としたい。可能性だけは常に残してほしいし、どのような工夫ができるかは、家庭の努力や行政の支援もあるかもしれない。

○教育長

公立学校の教育課程、端的に言えば、標準授業数が削減できるので、弾力的に運用できる。その浮いた分を、先ほど市長が言ったように地域に密着した体験学習ができるというサブメニューがつく。学びたいという学校には行けないが、分校に行くと少人数、マンツーマン方式で自分の学ぶプログラム的なものを作る。1人が基本だが友達と一緒に共同で学ぶこと、あるいは

はそこに先生も入り一緒に学ぶこともできる。その子の学び方、学びたい内容を学びたい方法で、その環境を生かして学べることは非常に弾力的なので、少しでも居心地の良い、自分に合った学び方ができることのプラスアルファとして豊かな体験活動が選べる。そして地域の人たちの力を借りる環境を作れば、家に閉じこもっている子どもたちにとっても、保護者も一緒に考えてもらえる、そのような環境を糸魚川市で作りたいという構想。課題は通学と設置場所。

○市長

市民の足の確保は行政の大きな仕事。補助金を使えば可能性は広がるし、いろいろな工夫ができる。やれる可能性は常に置き、問題が起きたときに対処法を考えておけばよい。

○教育委員

教育長の話を聞き、魅力的な学校になるという期待はある。既存の学校に適応できない子どもしか基本的に入れないので、そこに入りたいという子どもがいたら入れるのか。

○事務局

不勉強なところもあるが、学びの多様化学校という枠組みの中で考えると、名前が変わる前は不登校特例校という名前であり、不登校の児童生徒を対象にした学校になる。入学要件は、30日以上欠席がある、不登校傾向であることが入学要件であり、「教育課程が魅力的だから僕はこっちの学校に行く」とはならない。

○教育委員

学区の小学校ないし中学校へ在籍し、学籍をどこにするかという問題。

○市長

行きたい人が行けるような学校にしてもらいたい。

○教育委員

設置の問題もある。希望者が行ける形にするのか、教育課程を含めてどのように作るかで学校の基準は一応あるが、地域事情を丁寧に説明し弾力的な運用で認可されるかである。魅力ある学校作りとしてそこへ行きたいということ、小規模特認校というような学校指定を受ければできる。

○教育長

学びの多様化学校は不登校を対象にしたところが看板として出ているので、その部分は文科省との交渉によりはっきりしてくる。

○市長

生徒数が減っていく中で、何年か経過していくうちに少しずつ変わってくるかもしれないし、行きたいと言う子どもたちがそこで学べるような環境になるかもしれない。

○教育長

スタートラインであり、細かな調整が出てくる。

○市長

まずは多様化学校を作ってからバージョンアップしていく。行政は法的整備がないと動けない。ルールは何でも良いという話ではない。強い気持ちを持って作っていくことが大切。

○教育長

文科省通いが増える。半分ぐらい東京に住むぐらいの覚悟がいるかもしれない。全国で飛び抜けてやっているところをモデルにしながらやっていく。

○教育委員

学校のあり方検討委員会を設けるということだが、人数や専門性は。

○事務局

学びの多様化検討委員会は外部10名、府内10名で構成している。府内委員はそのまま残っていただき、外部も指導者的立場の方に入ってもらいたいので20名ぐらいの規模を想定している。多様化委員会では7年度に検討し、8年度に設置してもらいたいという要望が上がっている。

○教育委員

学校を作るにはいろいろな課題がある。できるだけ専属で携われるような形でやっていただきたいことを希望する。

○教育委員

不登校の子が高校に行くとなると南城高校しかなかった。行くには電車に乗っていくが、学校に行けなくなった子が電車に乗って行けるかという問題がある。途中で辞めてしまう。辞めてひきこもりになる子もいると思う。若者サポートで見ているが、活躍して頑張る子もいる。若者サポートも一生懸命やってもらっているが、認知度が低い。学ぶ意欲のある子どもに道を作ってほしいし、今日のこの話が本当につながってほしい。

○教育委員

スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーを増員してほしい。養成にも踏み込んで、今後考えていただきたい。例えば医療技術者の修学資金があるようにスクールソーシャルワーカーやカウンセラーになるための受験料や受講料、ある一定条件、糸魚川市で働いてもらうことを条件にするなど、考えてほしい。

(2) その他

なし。

4 閉会（15：10）